

風

神戸大学 広報誌 [kaze]
Kobe University Public Relations Magazine

Dec.2016 Vol.08

特集1
「協働型グローバル人材」のリアリティ
特集2 神大研究スームラップ
見えない危険を見せて知らせる新技術

神戸大生、実はすごいんですー12
・オフショアサーリング部

KOBE教育ー14
・KIBERプログラム

キラリ神大OC・OBー16
・ケニアドライフルーツ加工販売会社代表

特集1 国際人間科学部が構想する「学際」と「専門」の教育とは？

「協働型グローバル人材」のリアリティ

岡田章宏先生・丑丸敦史先生・伊藤友美先生

2017年4月、神戸大学に新しい学部が誕生する。国際文化学部と発達科学部の再編統合による「国際人間科学部」だ。海外研修とフィールド学修を必修化し、グローバルイシューを解決できる協働型グローバル人材を養成するという。3人の先生に話をうかがった。

鶴甲第1キャンパスの北側にある屋外階段。来春から同じ学部となる鶴甲第2キャンパスとの往来増加に備えて改修工事が行われていた。



布引の滝

六甲山のヒミツ

港とともに神戸のシンボルである六甲山は、裏山と呼ぶにはちょっと急峻過ぎる。しかしそのおかげで、風情のある滝も多い。新神戸駅から数分、伊勢物語にも登場する布引の滝はその代表格だ。六甲山がこれほどまでに高くなったのは、今から約300万年前の大地震と関係がある。突如としてフィリピン海プレートの運動が変化したのだ。その結果、この辺りの地盤に強烈な圧縮力が働くようになり、やがて断層に沿って山が隆起し始めた。この「六甲変動」は今もなお続いている。あの忌まわしき阪神・淡路大震災でも、六甲山は十数センチメートルも高くなった。



布引の滝付近から神戸港を望む

六甲山を成すのが、高級ブランド石材として名高い本御影石だ。江戸時代には、東灘に多くの石切丁場が並び、淡いピンク色の石が御影の浜から各地へと運び出された。この石の学名は「花崗岩」。おおよそ1億年前に、地下数キロメートルにあった折外れにでかいマグマ溜まりが冷え固まったものだ。もちろん、恐竜が闊歩していたであろう地上では、想像を絶する大噴火が起きたに違いない。最近、赤穂で見つかった直径20キロメートルを超えるカルデラ跡もその名残である。かつてこの辺りには、阿蘇を凌ぐほどの巨大火山がいくつも並んでいたのだ。

ところで、市花の紫陽花も神戸のシンボルである。確かに、六甲山系には紫陽花が多い。その澄んだ青色は、日本一との評判だ。紫陽花の青色は土壌中のアルミニウムイオンによるのだが、これは御影石に多く含まれる長石という鉱物に由来する。

こんなことを思い巡らしながら、キャンパスまでの急坂(教職員の間では定年坂と呼ばれる)を上っていく。



海事科学部の港から六甲山を望む

表紙写真：1年生が過ごす鶴甲第1キャンパス

国際文化学部がある鶴甲第1キャンパスには、語学や全学共通授業科目を受けるため、全学部の1年生が集まります。2年生以降は各キャンパスで学ぶこととなりますが、神大生のキャンパスライフが始まる場所。2017年4月、ここに新たな学部が誕生し、新しい風を吹かせます。

カメラ：大亀 京助



2学部への合流が可能にする

新時代の人材養成

まずは、新学部設置の牽引役である準備室長の岡田先生にご登場いただき。

「変える」ではなく「活かす」統合

— 2学部統合、新学部設置のおおまかな経緯を教えてください。

2013年ごろから、文部科学省は全国の国立大学に対して機能強化を強く求めるようになりました。そこでキータームのひとつになったのがグローバル化です。神戸大学の特色を活かしながら、いかにグローバル化を進めるか。そのひとつとして出てきたのが、国際人間科学部の設置ということになります。慎重意見が多かったのは事実ですが、攻めを考えたということですね。

— 学部の構成は従来とあまり変わらないようですが……。

国際文化学部は教養部から、発達科学部は教育学部から、1992年に改組されました。どちらも伝統的なディシプリン(学問分野)ベースで

はなく、イシューベース、つまり一定の目的のために様々な分野を集めた学部です。「これといった専門はないですよ」と言われながら、問題意識を共有して格闘してきました。この四半世紀で培った良いものが、どちらの学部にもあります。だから、ガラガラポンで新しい学部をつくる必要はない。むしろ、これまでの強みや特色を大事にして、それをいかに活かしていくかがポイントだと考えたわけです。

— 新学部のテーマといえるのがグローバルイシューですね。国際文化学部はともかく、発達科学部とは縁遠いような気もするんですが。

そうですね。基本的にはドメスティック(国内的)な学部です。しかし、そこで培ってきた実践的な感覚や理論、ノウハウといったものは、グローバルイシューを解決しようとするときの大きな武器になるのではないかと考えました。

新学部が掲げている人材像は「協

働型グローバル人材」です。いろいろなアクターとつながりながら、新しい解決策を探していく。発達科学部が培ってきた「生まれてから死ぬまで」の人間理解と、国際文化学部が培ってきた国際性や他者理解。これらを融合させることで、新たな人材を養成しようということです。

370名を海外へ送り出すには

— 海外研修が必修になるとか？

はい。グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)とって、海外研修とフィールド学修を組み合

わせたものです。

— 学部全員の海外研修は他の大学にもありますが、たいていは100名

ぐらいの学生を連れて行く修学旅行形式です。しかし、新学部の定員は370名。これほどの人数を一気に連れて行くなんて、なかなかできないわけですよ。ではどうするか。先

生方が世界中を走り回って、100以上のプログラムをつくりました。

— 気になるのは費用ですが……。

そうですね。私たちも、お金と安全が最大の課題だと考えています。まず、お金についてですが、最低でも十数万円、1年間の留学だと100万円以上かかります。神戸にいても生活費がかかるので、そこは差し引いて考えていただきたいのですが、そう簡単な金額ではないこともたしかです。短期の研修を含め、奨学金を利用できるように様々なサポートをしていく予定です。

安全については、1年生のときに

徹底的なオリエンテーションを行います。「危険だから行かない」ではなく、自分で自分を守れるようになります。そのため様々なマニュアルづくりなど、私たちも最大限の努力をしています。

— たとえ短期でも海外に行かせる

意図はどこにあるんでしょうか。やっぱり、行くと変わるんですよ。

ただの観光と違って、向こうの学生と話したり、何らかの問題に直面することで視野が広がる。たしかにお金はかかりますが、それに見合うものが必ず残る、損はさせないと確信しています。

グローバルイシューへの対応力

— 全国の国際系学部のなかでもユニークな存在になりそうですね。

国際系の多くは実際には国際教養ですが、国際人間科学部で学ぶのは、たんなる教養ではありません。学部名に「人間」という言葉が入っているように、一定の専門性をもっていることが大きな強みになります。その専門性を、グローバルイシューの解決にいか

に生かしていくか。具体的なテーマに実践的に対応することで、自分の学問の有効性をみずから確かめられる学部だと思っています。

これまでの2学部の卒業生は、とても柔軟だという評価を受けています。専門をもちながらも、そこだけに入り込むのではなく、いろいろなことに対応できる力がある。GSPを経験する新学部の学生たちは、柔軟であると同時に、強く、優しくあつてほしいなと思っています。いろいろな人の気持ちを理解して、一緒に問題を考え、解決していける人材を育てていきたいですね。

interview 1

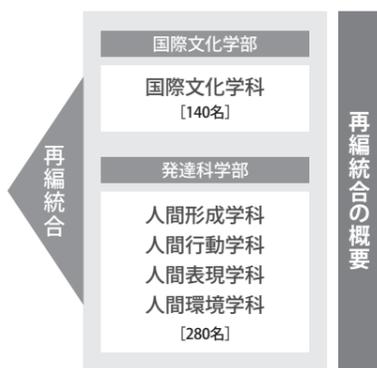
岡田 章宏

OKADA Akihiro



人間発達環境学研究科教授 国際人間科学部設置準備室長

1955年愛知県生まれ。1986年名古屋大学大学院法学研究科博士課程修了。1988年神戸大学教育学部講師、1992年発達科学部助教授、2007年人間発達環境学研究科教授。2013年発達科学部長・人間発達環境学研究科長、2016年学長補佐・国際人間科学部設置準備室長。専門は基礎法学。



- グローバル文化学科 [140名]
- 発達コミュニティ学科 [100名]
- 環境共生学科 [80名]
- 子ども教育学科 [50名]

国際人間科学部

再編統合の概要

再編統合

事後学修

[リフレクション]

- GSPによる学修体験の共有と比較
- グローバルな課題に対する自己の実践の意義付け
- フィールド学修についての成果発表とレポート作成

コース選択

留学型GSコース

中長期留学と現地でのフィールド学修

実践型GSコース

海外スタディツアーまたはインターンシップ

研修型GSコース

海外語学研修またはサマースクールと、国内フィールド学修

事前学修

[オリエンテーション]

海外研修やフィールド学修に必要な知識を修得

[GSP準備科目]

- グローバルイシュー概論
- グローバルイシュー演習

代表的事例の現状と解決策を専門的見地から学修

アクティブ・ラーニングを通じて具体的な事例を学修

グローバル・スタディーズ・プログラムの流れ



interview 2

丑丸 敦史

USHIMARU Atsushi

人間発達学研究科教授

1970年群馬県生まれ。1998年京都大学大学院理学研究科博士後期課程（生物科学専攻）修了。博士（理学）。1999年京大生態学センターCOE特別研究員、2001年総合地球環境学研究所非常勤研究員、2005年神戸大学人間発達環境学研究科准教授を経て、2013年より現職。専門は植物生態学。

身近な自然で世界とつながる

——生態学という動物をイメージしますが、植物の生態学なんですね。

大学に入ったときは昆虫を研究したいと思っていました。植物はあまり動かないから、つまらないだろうな（笑）。ところが、植物は花で昆虫をコントロールしているという文章を読んだ、これはおもしろいと思ったんです。それをきっかけに、花の形や咲かせ方などの形質を、昆虫との関係で植物がどのように進化させてきたか、一部の植物がなぜ自家受粉をするのかなどを研究するようになりました。だから、花と昆虫をセットで研究している状態ですね。

ずっと興味があるのは、人の近くにある自然です。人の行きや考え方が変わることで、生態系がどうなっていく

か。他分野の先生や学生と一緒に、そういう研究もしています。

——現在も新学部でも、文系に囲まれた理系ですよ。理系だけの学部とは異なる特徴があるんでしょうか。

人が好きな理系だと思います。理系って偏屈なイメージ（笑）があるかもしれないですが、ここにいる学生や教員はちよつと違うな。たとえば、生物多様性の研究で田んぼに行くときは、農家さん自分から挨拶して、立ち話に1時間ぐらい付き合うようなスキルがとても重要なんです。この学生は最初からそれができる。そういう気質がもともとあるような気がしますね。

——新学部への期待はありますか。

いろいろな人の話を聞いたり、知り合えたりするのは、すごくいいことですよ。サイエンスは専門性を高めていくことが重要ですが、いまは境界領

域におもしろいことがたくさんあります。興味を閉じてしまつと損だと思ふんですよ。おもしろいことを誰かと一緒にやろう、という雰囲気ができるといいですね。

——グローバルな視点が求められることについてはどうお考えですか。

理系はもともとグローバルな学問なんです。何を研究するか決めるときは、世界の人にもおもしろいと思つてもらえるオリジナリティーが重要です。成果を発信するときもグローバルを意識しないとダメです。そして、じつは自分たちの近くに、世界とつながるテーマがたくさんある。ヨーロッパの人たちが、東アジアの農業生態系に興味をもつていたりするんです。

そういう意味で、海と山と都市と里山がある神戸はとても恵まれた環境です。分野横断的な新しいテーマがもつ

と生まれるでしょうし、そうなればいいなと思いますね。

——どんな学生に来てほしいですか。

いろんなことに関心がありつつ、ひとつのことに集中できる人（笑）。なんだか背反するようですが、両立できると思うんです。アンテナを広く張って、自分に合うことを選んだら集中してやり抜く。そういう人にぴったりな環境じゃないかな、と。

私としては、理系のサポーターを増やすためにもこういう学部が必要だと思います。自分の分野のおもしろさを語れる、楽しく人に伝えられることが、これからは特に重要です。大学院では専門的な研究者を育てていますが、幅広く知った段階で社会に出て、理系のよさを説明できる人材も出したいですね。

——身近に一人はいてほしい、頼れる「理系の人」になれそうですね。

大学の生物って、ふつうはあまり数学や物理を使わないんですが、生態学は数学を多用するんです。統計的な解析もするし、プログラミングもできないといけない。理系のジェネラリストになる、いい条件がそろっています。ここで一生懸命に学べば、社会で必要とされる理系人材になれると思いますね。

たとえば、こんな、国際人間科学部の専門教育

国際人間科学部では何をどのように学ぶのか。そのすべてをここで紹介することはできない。しかし、現在は学部の違う2人の先生のお話には、どこか共通するものがあるように感じられる。

自分で発見し研究する4年間

——タイの仏教を研究されているそうですが、そもそものきっかけは？

大学のとき、北タイで現地の学生と交流する合同キャンプに参加したんです。それがすごく楽しくて、タイ語を習ってみようかなど。社会人向けの夜間の教室に通ったり、夏休みにタイの語学学校に行ったりもしました。その後、交換留学でカナダの大学に行つたんですが、その授業でブッタターゲットというタイの現代仏教の改革者を知り、卒論で書き始めたのが最初です。

タイの人々にとっては、よい生き方をするための軸になる教えが仏教なんです。宗教が社会をつくる基礎になつていて、ブッタターゲットの教えにも現代社会のいろいろな問題が反映されている。そんなところがおもしろかったですね。

——先生のご経験からいっても、海外に行く意味は大きそうですね。

自分の関心がどこにあるか、何がおもしろいかを探す手がかりがたくさんあ

るわけですよ。講義を聴いて漠然とした興味をもっている程度でも、実際に行って、人と出会つたり話をしたりすることで、自分はどこを専門的に伸ばせばいいかが明確に見えてくるんです。そのお手伝いをするのが、私たち教員の仕事だと思っています。学生一人ひとりの知的な好奇心を伸ばして、ひとつのかたちにする、つまり卒論として仕上げていくお手伝いです。これまでの学生もテーマは本当にいろいろでした。

——先生のおすすめは、やはりタイをはじめとする東南アジアですか。

興味があればぜひ（笑）。日本の文化に興味があつて親切な人が多いので、最初の海外としても居心地がいいはずですよ。それでいて、行ってみたいところからいかないことがたくさんある。自分で経験し発見する、その喜びを知るには最適の場所だと思いますね。

ある学生は、1年生の春休みに北タイの山地民の村でのステディーツアーに参加したのがきっかけで、タイのタマサー

ト大学への交換留学を決意しました。留学中、積極的にタイ語習得に取り組んだ結果、10か月後にはフィールド調査でインタヴューができるほどのタイ語力を身につけて帰国しました。その語学力を卒業研究に生かして、アルバイト先の三宮のタイレストランのシェフさんたちを中心にインタヴュー調査を行い、日本で働くタイ人シェフの職業生活世界を克明に描き出しました。同じ神戸の街に暮らす人々でありながら、言語や文化の壁に阻まれ、何を考え、どのような思いを抱えて生きているのか、想像もできなかった人々の世界が彼女の研究によって、明らかになったのです。

——学際的な学部だからこそ自分だけの専門を追究できるという面も？

たくさん講義を幅広く提供している分、学生は主体的に選ばないといけないんです。自分の関心に引つかかる講義を選んでいくと、講義を通じて得た視点、自分自身の分析視点として身につ

いていくともいえます。たとえば、ヨーロッパにおける外国人移民のアイデンティティや共生を巡る問題を学んだ際に得た視点が、ベトナムで出会った元技能実習生の日本での職業経験を巡る考察に生かされたりもします。

新学部もそうあつてほしいんですが、この学生は「国文愛」がすごいですよ。それは、学部が提供している授業や留学の機会、キャリアデザインのためのセミナーなどを、学生たちが自分のものにして、楽しんで使ってくれているからだと感じています。

——自分のテーマで研究した経験はどこに行っても生かせそうですね。

本当にそう思いますね。これまで、東南アジアに進出している大手企業に採用された卒業生がけっこういるんです。社人になつてから、しかも企業のブランドを背負つて現地の人と交流するのはなかなか難しいんですが、何もない学生のうちに友達として人間関係をつくった経験があると、その後のかわり方が違うんですね。そういうところに企業も大きな期待を寄せているようです。

私のゼミは東南アジア研究ですが、他のアジアやヨーロッパ、アメリカを含め、世界の文化や社会を展望しながら仕事を、そういう将来を考えている人には、国際人間科学部がいい入口になると思いますね。



interview 3

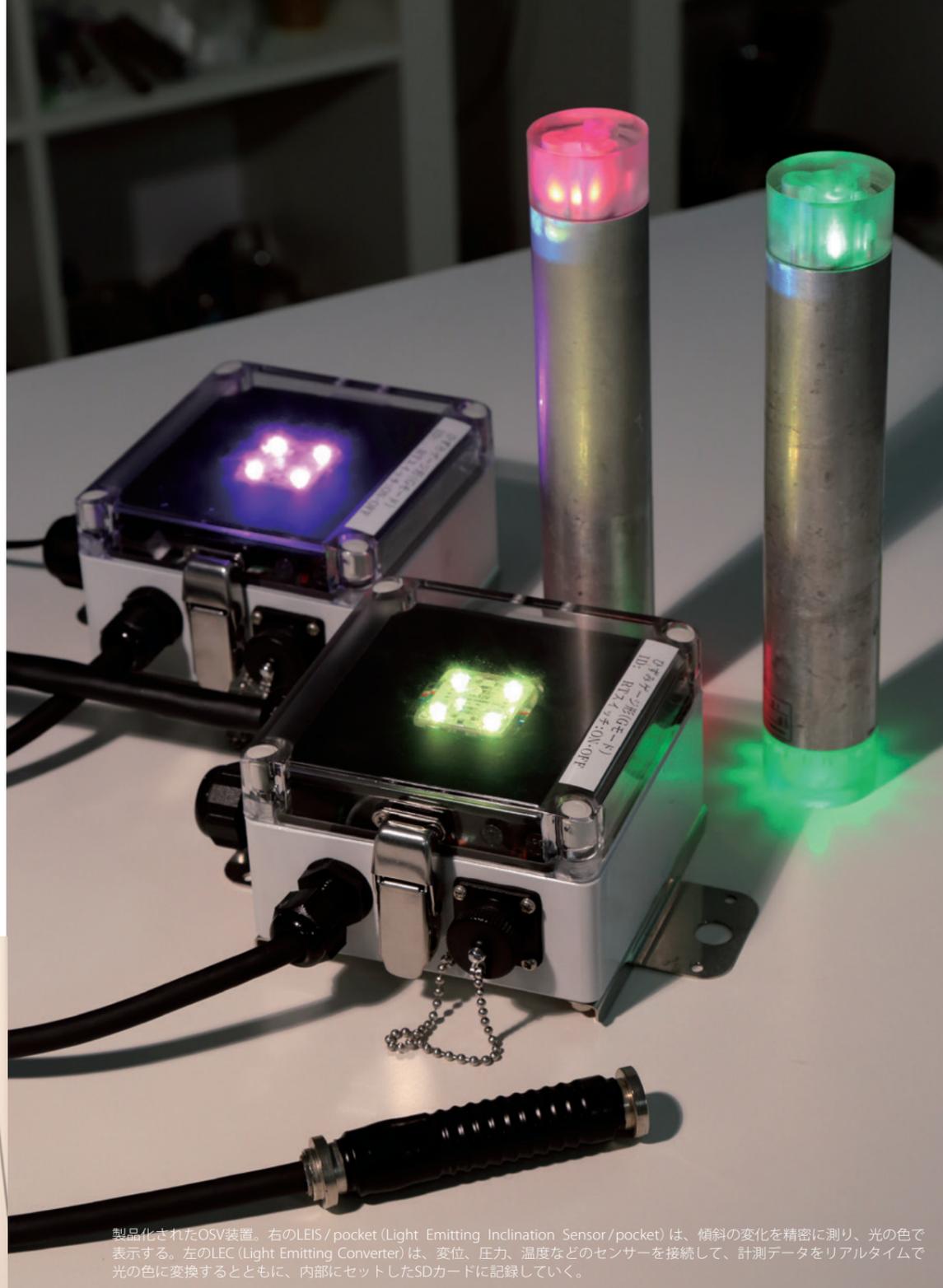
伊藤 友美

Ito Tomomi

国際文化学研究科准教授

広島県生まれ。1996年上智大学大学院外国語学研究科博士前期課程修了、2001年オーストラリア国立大学東南アジア研究プログラム大学院博士課程修了。Ph.D.（東南アジア研究）。2001年神戸大学国際言語文化学科講師、2002年神戸大学国際文化学部専任講師を経て、2004年同学部助教授。専門は東南アジア地域研究。

見えない危険を見せて知らせる新技術



製品化されたOSV装置。右のLEIS/pocket (Light Emitting Inclination Sensor/pocket) は、傾斜の変化を精密に測り、光の色で表示する。左のLEC (Light Emitting Converter) は、変位、圧力、温度などのセンサーを接続して、計測データをリアルタイムで光の色に変換するとともに、内部にセットしたSDカードに記録していく。

神戸大学発の新しい方法論が、いま世界へと広がりがつつある。工事現場などで事故の兆候を検知し、その場(On-Site)可視化(Visualization)するOSV技術だ。2006年に手作りの装置からスタートしたOSVは、多くの企業を巻き込み、非常に高度で精密なシステムへと成長する一方、よりシンプルで、より安価な方向へも走りはじめている。それはどんなしくみで、どう役立つのか、なぜ急ピッチで展開できたのか、シンプル化によって何をめざしているのか。OSVの生みの親であり、産官学が参加する研究会の会長でもある工学研究科市民工学専攻の芥川真一先生に詳しい話をうかがうべく、先端膜工学研究拠点(本誌6号表紙)の真新しい建物内にある研究室を訪ねた。

「なんとなく」をカタチに

—— OSVのアイデアはどのようにして生まれたんですか。

もともとの専門は、土木のなかでも特に硬いほうの岩盤工学という分野なんです。たとえば、岩盤にトンネルを掘るとどうなるか。現場に行ったり、実験をしたりするよりも、コンピュータを使ってシミュレーションするほうが研究者でした。

2003年のことですが、当時建設中だった北陸新幹線のトンネルで大きな崩落事故がありました。それ以来、なぜそんな事故が起きたの

か、安全管理はどうなっているのかと気になりはじめたんです。それから3年ぐらいい、何が出来るだろうと考えていたんですが、あるとき、色を自由に操れるフルカラーLEDが意外に安く買えることを知って、「これだ」と思ったんです。

下手でもいいから自分たちでやってみようということ、2006年に最初に作ったのが「光る変位計」。2点間の距離をワイヤーとバネで測り、変化に応じてLEDの色が変わっていくというしくみです。

で、それを見たある企業が、もったかっこいい(笑)LEDSという装置を作ってくれました。これは持ち運びが簡単なので、いろんなところに行つてプレゼンやPRをしたんです。そうするうちに「芥川さんがやりたいこと、何かわかった」と言ってもらえるようになり、2010年にOSV研究会を立ち上げました。最初は18、現在では71の企業と情報を共有して、OSVの開発や普及に取り組んでいます。

—— すごい急展開ですね。

OSVのコンセプトを説明すると、「ああ、それそれ」という反応が多いんです。「そういうの、なんとなくやりたかったんですよ」。

従来の土木の現場でも、もちろん計測はしていたんです。たとえばト

ンネルを掘っている先端に行くこと、地盤の変化を測るセンサーが設置してあります。でも、それで計測したデータは、離れた場所にある計測小屋のパソコンを見ないとわからないんです。事故が起これば数秒



interviewee

芥川 真一

AKUTAGAWA Shinichi

工学研究科教授

1959年愛媛県生まれ。1983年神戸大学工学部土木工学科卒業、1984年アメリカ・ワシントン大学大学院修士課程修了、1991年オーストラリア・クイーンズランド大学大学院博士課程修了。Ph.D. 1991年クイーンズランド大学ジュリアス・クルッシュナッツ鉱物研究センター研究員、1991年名古屋大学工学部附属土研研究施設助手、1992年神戸大学工学部助手、1997年同助教授を経て、2009年より現職。専門は岩盤工学・安全管理。

を争う状況ですから、そこで何か起きていなければならぬ、そこで見えるのがベスト。その点にすぐこだわりのあって、これまでいろいろと模索してきた感じですよ。

データが十分なら計算不要!!

—— OSVによって被害を防ぐことができたケースはあるんですか。

高速道路の工事なんです。一時的に設けた急な斜面に、LEC(右頁写真)を何セットも置いていたんです。その色が頻りに変わるので、現場の方が注意して見回ると、割れてはいけないうコンクリートが割れていたりした。そこで、当初の予定にはなかった補強をして、何事もなく終わったということがあります。



インド・バンガロールの地下鉄工事でのOSV使用例。開削工事現場に隣接するビルへの影響を、付近の住民にも見えるように表示している（青色なので影響は微小）。

ハイテクだけに頼らない シンプル化の必然性と必要性

「事故が起きるときは必ず前兆があるんじゃないか。あります。おかしい動きが必ずあるんです。肉眼ではわからない小さな動きも、センサーを付けておけばほしいは把握できます。」

ただ、そのセンサーが何万円もすると、現場のすみずみに付けるわけにはいかないんですね。たとえばトンネルだと、100メートルごとに1個付いてるとか。

私がコンピュータでやってたのも、トンネルのところでどこで計測した限定的なデータにもとづいて「全体はこうなっているだろう」と推測する計算なんです。推測することはできますが、データを取っていないところが本当はどうなっているか、誰も保証できませんよね。「こんな少ないデータで全体のことを言っているんじゃないだろうか」という気持ちがつねにありました。もつとデータがほしい。あればあるほどいい。もし、トンネルの端から端までずらっとデータがあつて、現場でそれを把握できるなら、コンピュータで計算しなくてもいいんじゃないかと。

夜、車で走っていると、光を反射するブロックが道路の端にきれいに並んでいるのがわかりますよね。私たちも、早くあれぐらいの数に行きたいんです。たとえば、現場を区切るのは、針の根もと、下の部分のプラスチックが青・黄・赤に色分けされてますよね。このように光ファイバーを付けると、針の動きの大きさによって違う色の光が入ります。こうしておけば、光ファイバーの一方が何色に光るかを見るだけで、離れた場所から異常を知ることができます。そのへんにある光をタタでいただいているので（笑）、光源を別に用意する必要はありません。

もつとも、電気ゼロでこれだけシンプルなものだと、どの会社さんも「これは儲からないな」とすぐに気づくんです（笑）。外国で生産して利益を上げるようなビジネスモデルをつくれないうか、よく議論はしてるんですけどね。

—— おー、本当に色が変わりますね。

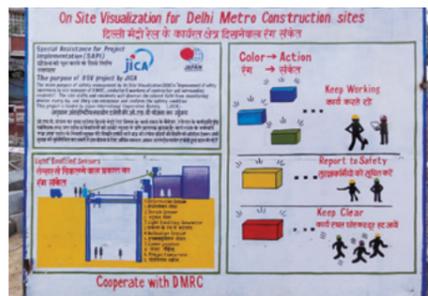
これは目で見てわかるケースですが、光センサーにつなぐことで小さな変化を読み取ることもできます。光を出す側と光を拾う側、2本の光ファイバーをセットにして、たとえば土のなかに差し込みます。何も起こらなければ帰ってくる光も変化しませんが、光ファイバーの先端で砂粒がひとつでも動けば、反射のしかたが変わって、帰ってくる光にも変化があります。土砂崩れを予測するための、チマチマしてるけど大事なデータが集められるわけです。

「事故が起きるときは必ず前兆があるんじゃないか。あります。おかしい動きが必ずあるんです。肉眼ではわからない小さな動きも、センサーを付けておけばほしいは把握できます。」

ただ、そのセンサーが何万円もすると、現場のすみずみに付けるわけにはいかないんですね。たとえばトンネルだと、100メートルごとに1個付いてるとか。

私がコンピュータでやってたのも、トンネルのところでどこで計測した限定的なデータにもとづいて「全体はこうなっているだろう」と推測する計算なんです。推測することはできますが、データを取っていないところが本当はどうなっているか、誰も保証できませんよね。「こんな少ないデータで全体のことを言っているんじゃないだろうか」という気持ちがつねにありました。もつとデータがほしい。あればあるほどいい。もし、トンネルの端から端までずらっとデータがあつて、現場でそれを把握できるなら、コンピュータで計算しなくてもいいんじゃないかと。

夜、車で走っていると、光を反射するブロックが道路の端にきれいに並んでいるのがわかりますよね。私たちも、早くあれぐらいの数に行きたいんです。たとえば、現場を区切



インド・ニューデリーの地下鉄工事現場に設置されたOSVの説明ボード。何色になったらどう行動すべきかが、英語とヒンディー語で書かれている。

このシステムでは、センサーやパソコンには電気を使いますが、光ファイバー自体はプラスチックなので、電気的なトラブルの心配がありません。だから、どこに突っ込んでも大丈夫、海の中でもぜんぜん平気。海洋研究開発機構とのコラボで海の砂の移動を測る研究にも使いましたし、先端膜の松山先生たちと共同で膜の汚れを測る研究も進めています。

誰でも簡単に使えるOSVへ

—— 工事現場以外にもいろいろ使えるわけですね。他にはどんな？

ひとつ考えているのは宿題キットです。OSVがどんどんシンプルになつていって、夏休みの宿題に使えるようなネタが何個もあるんですよ。小学生のときから、こんな簡単なくみで異常の検知と情報共有ができるんだと体験しておくことで、

大人になつてからの防災意識も変わると思うんですね。大学で研究している何か難しいものではなく、みんなのできることでしょ。

防災ということでは、山崩れで人家が押しつぶされるような事故がありますよね。危険な斜面は全国津々浦々に存在します。それなら、自宅の裏山が崩れないか心配な人が、たとえばホームセンターでOSVの装置を買って、自分で取り付けるようにできないか。装置はいろいろとできそうなので、使い方をいかに知らせるかが今後の課題になると考えています。

いちばん理想的なのは、何も持っていないなくても、まわりを見るだけで状況を把握できる、命を守るのに必要な情報が得られる環境をつくることだと思います。すべてのデータを、できるだけリアルタイムで伝える。そういう状態に一步でも近づくと、事故は確実に減りますから。



三角コーン。あれがOSVの機能をもっていれば、予算がいくらで、10万円のセンサーを何個、どこに付けるかなんてプロセスはいらなくなります。コーンを置くだけで、もう勝手に付いてるわけですから（笑）。

光ファイバーの意外な活用法

—— そのためには大幅なコストダウンが必要ですね。可能なんですか。

研究会にいろいろな業界の企業が入ってくれたこともあって、以前は



本文で先生が説明している、電気を使わないOSVのデモ品。右手で持っている黒い線が光ファイバー。長さ100メートルぐらいまでなら色の違いを見分けられる、とのこと。

20万円かけないとできなかったことが、いまなら1万円です。できるだろう、といった話が次から次へと展開しています。

ひとつの方法は、電気を使わないこと。これはデモ品（右の写真で先生が持っている装置）なんです。ここに伸びているヒモとバナで変位を感じると、文字盤の針が回ります。これでもちゃんとシグナルになつて、ランニングコストはゼロ。

もうひとつ、この装置がおもしろい

神大生、 実は すごいんです！

オフショアセーリング部

重岡 諒真 SHIGEOKA Ryoma

奥中 勇太 OKUNAKA Yuta

守屋 有紗 MORIYA Arisa



写真左から奥中、重岡、守屋

オフショアセーリングとはセイル(帆)を張り、風力で進むクルーザーヨット競技。神戸大学オフショアセーリング部は2001年、神戸商船大学での大型ヨット「クライナーベルク」の進水を機に設立され、2003年、神戸大学との統合を経て、現在に至ります。
今年3月のAMORUS CUP 2016(全日本学生外洋帆走選手権)で優勝し、秋にフランスで行われたStudent Yachting World Cup 2016(世界学生クルーザーヨット選手権)に出場しました。結果は8位と過去最高順位の6位には届きませんでしたが、得られたものは大きかったようです。そして、すでに来年の世界学生選手権に向けて動き始めています。

世界の学生と競い、交流を深める

重岡 諒真 — 世界学生選手権チーム代表

海事科学部マリンエンジニアリング学科機関マネジメントコース4年

日本で勝負するのは違い、レベルの高いレースでした。ヨーロッパの学生は幼いころからヨットに乗るなど、ヨットが身近にある環境で育ちます。そんな強豪に立ち向かうのが世界学生選手権。大会では、決められたブイや島を回って、ゴールラインを切るコースや風下と風上に打たれているマークの周りを回って帰ってくる上下コース、夜に競うナイトレースなど様々なコースがあります。純粹に風の力のみで走り、スピードや戦術を駆使して、順位を競います。私はヘルムスマンで舵取り担当でした。地点やタイミングによって、どう航路を進めていくか、決断を迫られるボジション。先を読みながら、進め方を考えて、メンバーにも指示しました。結果は最下位でしたが、接戦のレースもあり、楽しみながら走ることができました。

大会を通じて、学んだことは本当に大きいです。アジア圏で唯一出場し、周りは欧米チームばかり。言語は英語が当たり前の環境でした。片言やジェスチャーでも通じましたが、語学力の大切さを痛感しましたね。お酒を交えながら、交流できたこともよい思い出です。

海や風を感じながら、世界に挑む！

奥中 勇太 — 副将

海事科学部マリンエンジニアリング学科メカトロニクスコース3年

部員は100人を超え、レースに多く出たり、クルージングを楽しむことを中心にしていたり、それぞれが自由に活動しています。海事科学部の部活というイメージがありますが、農学部や理学部、発達科学部など他学部の学生も所属しています。全員、大学から始め、初心者です。しかし、学内にある部活のなかで、世界で戦える数少ない競技。今回を含め、世界選手権には5回出場しています。

特徴的なのは、月1回くらいのペースで行うクルージング。練習も兼ねて大阪湾や淡路島まで出かけます。和歌山や徳島まで行くことも。観光もたくさんでき、メンバーの仲も深めることができるよい機会です。通常、クルーザーヨットは他のマリンスポーツよりお金がかかりますが、神戸大学では、あまり負担なく始められます。「大学から新しいことに挑戦してみたい!」という人は、まず体験しにきてもらいたいですね。

来年も世界学生選手権に出場、さらには2015年に記録した過去最高の6位を上回るができるように部員一同、頑張りたいと思います。



世界の舞台で戦う オフショアセーリング部

OFFSHORE SAILING CLUB

男女同じフィールドで楽しめる！

守屋 有紗

海事科学部グローバル輸送科学科ロジスティクスコース3年

高校時代は理系でしたが、進路を決める段階で社会のモノやお金の動きを学びたいと思いました。理系の試験科目で受験でき、経済系の分野を学べるところを探しました。海事科学部は1年次に学科配属がなくて、1年次の終わりに希望の学科を選びます。グローバル輸送科学科は経済・経営・法学から工学まで幅広いテーマを扱っており、自分の興味のあることを学ぶことができます。私は物流や海上貿易を学んでおり、海から神戸港や瀬戸内沿岸の産業関係施設を見たり、関西空港の貨物施設の見学や関西空港沖で深夜の貨物便の発着を観察したりする乗船実習にも参加しました。

オフショアセーリング部との出会いは新歓期の試乗会。風が気持ちよく、波の音やヨットの走る姿が一瞬で好きになりました。こんな楽しいスポーツはないと思い、入部を決めました。いまは来年3月に行われる全日本学生選手権に向けて、出場メンバーで練習の真っ最中です。クルーザーヨットは女性でも活躍できるボジションがありますし、女性と男性が同じフィールドで戦える数少ない競技。私は艇長を務めることもあり、すごくやりがいがあります。ぜひ一緒に海や風を感じましょう。

神戸から経営人を世界へ 英語で学ぶGlobal

KIBERプログラム

Kobe International Business Education and Research Program

プログラム
留学経験



吉田 覚 YOSHIDA Satoru
経営学部経営学科 4年

昨年の10月から今年の6月までウィーン経済経営大学に交換留学していました。もともとこのプログラムに参加し、留学しようと思ったきっかけは1年生の夏に経験したイギリス1人旅。現地でも買い物しようとしたときに英語が話せず、悔しい思いをしました。英語を話せたら違う世界を知り、何かが変わるだろうと。英語の先生になりたいと思っていたこともあり、KIBERの門を叩きました。

しかし、いざ留学してみると「英語」が絶対大事というわけではなかったんです。少人数双方向性の授業では、手を挙げて発言する勇気が求められました。また、多種多様な人との交流で国境、文化を越えた他者を受け入れることがいかに大切かということを感じましたね。全く先の見えない、逃げられない環境に身をおくことで新しいことが見えてきました。私が留学中、掲げていた言葉が「Always say yes. (いつでもイエスと言う)」、「Leap before you look. (見る前に飛び)」です。ただ座って授業を受けているだけでは、何も見えないです。「とりあえずやれ！」動いて自分を見つめ、自分と戦い、新しい世界を見る。それが自分なりの留学の答えです。

いまは日本語の美しさを伝えたくて、国語の先生か外国で日本語を教える仕事に就くのが夢です。留学を通して、文化としての日本語を残したいと強く思うようになりました。その繊細さこそ、世界に誇るものだと考えています。

プログラム
履修生



市川 リサ ICHIKAWA Lisa
経営学部経営学科 2年

過去に海外に行ったことがあり、自分の意見をしっかり持っている海外の同年代の人たちに刺激を受けました。文化も生まれ育った環境も違う、私もそういう人たちとこれから競争していかなければいけない。単なる語学留学でなく、しっかり経営学について学びたいと思い、KIBERプログラムを履修しようと決めました。

授業ではプレゼンテーションの機会が多く、悪戦苦闘しています。経営、経済、社会問題などを英語で話し合います。しかし、半年間同じ仲間と共に机を並べ学ぶことでお互いの成長が見え、自分を奮い立たせることができている。私はもともと引っ込み思案な性格ですが、人前で発表する力がつきました。今ではプレゼンテーションとディスカッションが楽しいです。熱く意見を交わすようになるなんて、半年前の私たちでは考えられませんでした。つらいと思う時もあります。留学前にしっかり準備できるのでありがたいですね。

いまは、来年の秋にイギリスのカーディフ大学に留学することを目指して勉強中です。留学先では、経営・経済をしっかりと学ぶことはもちろん、広大な自然や文化にも触れ、日本との違いを体感したいですね。専門知識をしっかりと身につけ、自分という芯をしっかりと持って行動する。留学を終えたとき、そんな人になりたいです。

という前半の2年半は日本語で一般教養と経営学の基礎を学び、後半の2年半は英語で専門的な経営学（1年は海外での交換留学、1年半はSESAMIプログラム）を学び、経営学の学士と修士を5年で取得するプログラムが始まります。海外の大学で学ぶことで、見識を広めてほしい。自分の目で色んなものを見ることで、広く深く判断力がつくはず。このプログラムは、神戸大生の固定概念を変える機会となるでしょう。

プログラム生は他の学生とどこか違うんです。そう、殻を破らないのです。ここ数年で、「KIBERプログラムがあるので神戸大学経営学部に来ました」という新入生が数人、私に会いに来てくれました。経営学部に来たなら、KIBERプログラムをステップとして羽ばたいてほしい。能力の限界を作っているのは、自分自身なのです。できないと思わないで。神大生ならきっとできるはず。目標を持つことで、成果は最大限のものとなる。英語にたとえると、毎日触れることで習慣化され、積み重ねによって英語に慣れるようになったところでしょうか。KIBER

経営学は5年かけて学ぶ、というのが欧州標準です。グローバル経営人材を育成するには、神戸大学が先頭に立って取り入れるべきだと考えています。履修後には、英語による経営教育で修士・博士取得を目指すSESAMIプログラム（GMAP in Management - SESAMI）を用意しています。さらには来年度からKIMERA（Kobe International Management Education and Research Accelerated Program）

KIBERプログラムはハードだからという先入観から二の足を踏む学生がいるという現状ですが、経営学部定員の1割の学生が参加しており、今後レベルをどう維持するか、2割に増やすのか、いかに優秀な学生を送り出すかが課題となっています。確かにハードなカリキュラムではありますが、それを乗り越えた学生は留学派遣人数でいうと昨年と比べ2倍に増え、取得単位数も1番多い学生で40単位も取って帰ってくるようになりました。それは、送り出す前に外国では当たり前前のディスカッションをしっかりとやる授業スタイルによって、前へ前へとという姿勢が変わったからではないかと考えています。いまの体制ではコスト面、外国人留学生が多いことから授業受け入れ人数にも限りがあり、30人の定員がギリギリです。しかし、定員を作ることで競争原理が働き、より優秀な学生を育てることができると思います。目標を持つことで、成果は最大限のものとなる。英語に



プログラム設計
経営学研究科 教授
松尾 博文
MATSUO Hirofumi



担当教員
経営学研究科 講師
西村 幸宏
NISHIMURA Yukibiro

KIBERプログラム（Kobe International Business Education and Research Program）は、経営学分野で世界に通用する人材を育成することを目的とし、2011年に経営学部でスタートした交換留学をサポートするプログラムです。プログラム生は2年生の第1クォーターから第4クォーターまでの1年間にプログラムに関連する授業を原則すべて履修し、その後1年間留学します。このプログラムに参加できるのは約30人。その狭き門に参加している学生、プログラムを考案した先生方から従来の留学とは違う点をうかがい、いったい経営のグローバル人材とはどのような人なのか探りました。



インタビュー
学生広報チーム
船越 茉莉
FUNAKOSHI Mari
経営学部 人間環境学科 2年

新たな産業創出で貧困解消を

東アフリカに位置するケニアは農業が盛んな国。しかし、収穫後のマンゴーの廃棄率は4割を超えている地域もあり、農家は安定した売り先の確保が難しいなどの課題を抱えています。そんなケニアでドライフルーツ加工販売会社を設立し、地域に根ざした持続可能な事業を目指すのが山本歩さんです。



山本 歩 YAMAMOTO Ayumi

1980年、大阪府柏原市生まれ。神戸大学農学部卒。2011年、青年海外協力隊員として、ケニア・マチャコスで果樹栽培の支援に取り組む。2014年、ドライフルーツ加工販売会社「ケニア・フルーツ・ソリューションズ」を設立し、代表を務める。

—ケニア・フルーツ・ソリューションズとはどのような会社ですか？

現地の果物農家のグループから果物を買い取り、加工して販売する事業で、マンゴーやパイナップルを扱っています。果物は季節性が高く、収穫時期になると国内の市場ではあふれてしまい、売れ残り腐ってしまうということもあります。

—農学部に進もうと思われたきっかけを教えてください。

高校生の時に両親と一緒にフィリピンへスタディーツアーに行く機会がありました。現地のスラムを訪問した際に、自分と同世代の子どもたちが、十分な食事をとれていない状況に衝撃を受けました。その頃から「食は命である」と考え、将来は途上国の食や農業に関わる分野で仕事をしたいと思ったのがきっかけです。

—そこでは、どのような勉強や研究を？

私は3年生から神戸大学に編入し、作物学

村部に足を運んだときにスムーズに必要なことを調べて、状況を把握し、自分なりにやるべきことの道筋を立てることができたと思います。

—いつ頃から本格的にアフリカで農家支援に携わろうと思われましたか？

2011年に青年海外協力隊で活動してからです。学生時代に一度、青年海外協力隊に応募したのですが受かりませんでした。卒業してからは、農業高校で常勤講師をしたり、民間会社で働いたりして、海外で仕事をするということはまだあまり考えないようになっていました。しかし、30歳になった時に、電車でたまたま協力隊の吊り広告を見かけたんです。

「そういえば大学のときは、アフリカに行ってみたくて考えていたな」とふと思いつき、応募してみたところ、合格することができました。素敵な巡り合わせですね！それで、協力隊員としてケニアに行かれたと。

そうですね。そこで初めてケニアに行きました。実際に現地に行ってみると、首都のナイロビなどには思ったよりも発展しているなどという印象でした。英語も通じますし、生活基盤も整っていて、居心地は想像以上に良かったです。

私は協力隊の職種の一つである「村落開発普及員」（現在は「コミュニティ開発」として赴きました。その地域でのニーズや課題を自分で見つけて、それに合わせて活動を行っていくという仕事です。

—なぜマンゴーに特化しようと思ったのですか？

ちょうど私がケニアに渡航した2011年は東アフリカの干ばつの年で、主食であるメイズ（とうもろこし）や豆が少雨の影響で育たずに枯れているという状況を目の当たりにしました。干ばつの耐性が強い作物をケニアの農業省が推奨していたので、干ばつに強いマンゴー樹は、地域の農家の収入向上や栄養改善に寄与できるのではないかと考えました。干ばつに強い作物には、他にもソルガム（もろこし）やカウピー（ささげ）といった穀物などもあります。マンゴーはケニアの半乾燥地域では栽培に適しているのですが、安定した売り先がないという理由や、仲買業者が安値で買い取っていくという状況が長年続いており、私が活動していた地域では農家の収入源としてはあまり重要視されていません。マンゴーを適正価格で買い取り、加工して売ることができれば、地域の農家の皆さんの収入源となり、少しでも貧困解消につながるのではないかと考えるようになりました。

—そして、会社設立に至るのですか？

そうですね。ただ、自分だけでは、会社を興すところまではいかなかったと思います。隊員のときにケニアで成功した実業家の方にお会いし、「アフリカだからできないということはない」という言葉が心に響き、自分も何かできればいいなと考えるようになりました。「まずは半年やってみて、継続するかどうか決めよう」と、会社を設立。最初からどうなるかわからないと考えるすぎて動かないままだと、何もできません。とりあえずやってみる。私の場合は、協力してくれたら、知恵を



貸してくれる人が現れました。日本側でケニアの事業をサポートしてもらっている日本オフィスは、任地が同じだった先輩隊員の方に手伝ってもらっています。人とのつながりで何とかなっているのがありがたいですね。

—展望を教えてください。

このまま事業を拡大し、農家からの果物の買取り量と製造現場での雇用数を増やしていきたいですね。現地で生活や仕事をしていると、価値観の違いに驚くことがたくさんあります。日本人の私たちが当たり前だと思っていることが通用しないという世界。思い通りにものが進まず、予想以上に時間がかかるというのはよくあります。当初は私自身が製造現場の指導・監督を担っていましたが、徐々に食品加工の知識を持ったケニア人の社員に任せていっています。品質の良いものが安定して生産できるように引き続き取り組んでいきたいと思っています。



■インタビュー 学生広報チーム 中村 国男 NAKAMURA Kunio 工学部電気電子工学科 4年

日本語がかなり上手ですね。
どうやって身につけましたか？

在学中も少し学んでいましたが、大学を卒業してから半年間、日本語をきっちり勉強しました。語学学校に週2回通いつつ、週1〜2回は日本人の家庭教師に教えてもらいましたね。文法はだいぶ分かったのですが、日常会話はあまり上達せず……。初めて来日したときは英語しか話せなかったの、なかなか日本人学生に話しかけられませんでした。しかし、日本語は面白く、色々な人と話すことで徐々に上達してきたのかなと思います。

神戸大学でのキャンパスライフは？

きちんと研究しながら、よく観光にも行きます。東京、奈良、和歌山の白浜など。奈良では、東大寺などお寺巡りや鹿と戯れました。日本のビールはおいしいですし、研究室の仲間とよく飲みに行きます。また、健康のために水泳にも通っています。研究室の仲間は研究熱心で、刺激を受けますね。

将来の夢について教えてください。

ずっと量子化学の研究に携わりたく、大学や研究所で仕事をしたいと思っています。量子化学の研究を続けて、新しい機器などを発明できればうれしいですね。現在、量子化学の計算方法を使い、様々な分子の振る舞いをシミュレーションできるところまでできています。いつか計算機や計算アルゴリズムをうまく使い、タンパク質やDNAなどもっと大きな分子を高精度にシミュレーションできるようにしたいですね。そして、量子化学の分野だけでなく、人類に貢献があるものを発明していきたいです。



ハンガリー国会議事堂



聖イシュトバン大聖堂



マーチャーシュ聖堂

ハンガリーの食生活は
どんな感じですか？

主食はじゃがいもやパスタ、パン。ライスは週1〜2回くらいしか食べないですね。シチューやスープはアレンジレシピが豊富で、よく食べます。あまり知られていませんが、ハンガリーはパプリカの一大産地。乾燥させて、粉にして、煮込み料理など色々な料理に使います。焼きそば、焼肉、ラーメン、お寿司…日本の料理も大好きです！



ハンガリーのシチュー

神戸大を選んだきっかけを
教えてください。

量子化学を研究するには、計算ソフトが欠かせず、またソフトの起動に対応するパソコンも必要で、ブダペスト工科大学時代の私の研究室にはあまり大きい計算機がありませんでした。インターネットで調べてみると、日本にはスーパーコンピュータ「京」という計算機があると分かって、「京」に対応する(並列化を用いる)プログラムを開発したいと、日本に留学しようと決めました。日本にある大学のなかでも、神戸大学は「京」と連携を取っていて、ここなら自分のやりたいことができるなど。また、ハンガリーでの指導教員の友人は神戸大学の指導教員の知り合いという、何とも狭い世界。そんな縁もあり、神戸大学で研究したいと思いました。

日本の最先端計算技術を学び 計算ソフトの開発を目指す

ハンガリーという国名はよく聞きますが、訪れたことのある人は少ないのではないのでしょうか？写真で見れば見るほど美しい王宮が多く、見とれるばかり。そんな憧れのヨーロッパにあるハンガリーから神戸大学にやってきたラドーツキさんに話をうかがいました。

Szia!

ハンガリー語：こんにちは！

神戸大学に来る前は
どうだったの？

現在の研究とも関係しているのですが、ハンガリーのブダペスト工科大学物理化学材料工学研究科で4年間、学部生として電子状態に関する研究活動に携わってきました。偏微分方程式を解くことによって、原子または分子のなかの電子構造を明らかにすることがテーマ。電子状態を正確に求めると様々な化学現象を説明できるようになるので、多体問題の解決方法が昔から研究されています。原子・分子の大きさによって、計算時間が異なるのでできるだけ計算コストが低いアルゴリズム、または計算速度の速いプログラムを開発することが求められていました。そこで、私は多配置クラスター展開法 (Multi-Reference Coupled Cluster Algorithm) に対応する二電子積分を計算するソフトウェアを開発しました。私が作ったプログラムの計算時間は、現在使われているほとんどの量子化学ソフトウェアの計算時間より速いです。

現在の研究テーマを
教えてください。

量子化学がテーマで、簡単に言うと電子(分子や原子)状態のなかの構造を求めるため、計算ソフトを開発しようと研究しています。化学と物理学、数学、情報学を混ぜて使い、数値的計算方法で微分方程式を解く毎日。計算方法は自分で考え、できたプログラムを実行してみたら結果が合っているかどうか確認。正しい結果が出ただけではだめで、より速く計算できることを目指しています。苦戦していますが、頑張らないといけないと思っています。研究室で寝泊まりということはありません！朝早くから来て、夜はきちんと帰るようにしています(笑)。



研究室のメンバーと

こんにちは！ 留学生です

世界各国から来た約1200人の留学生が神戸大学で学んでいます。このコーナーでは、母国の文化や習慣などの話を交えながら、国境を越えて頑張っている留学生にスポットを当てます。



ベンツェ・ラドーツキ
Bence LADOCZKI

システム情報学研究科博士課程前期課程2年
ハンガリー出身。2014年10月、神戸大学に研究生として来学。2015年4月、大学院生となり、現在に至る。好きな日本語はてごぼこ(擬音語、擬態語の響きが好き)。



ハンガリー

中央ヨーロッパの共和制国家でEU加盟国。人口は約990万人。首都はブダペスト。国土はハンガリー平原と言われる広大な平原を中心としており、過去には様々な民族が侵入し、定着してきた歴史がある。

International NEWS

【日本・ベルギー友好150周年記念事業】

ベルギー協定校と記念シンポジウム/ ベルギー国王・王妃両陛下ご出席のAcademic Lunch開催



日本・ベルギー友好150周年を記念したフィリップ・ベルギー国王、マチルド王妃両陛下の来日に合わせ、10月14日、随行のベルギー大学長一団を招聘し、国際共同研究の成果を報告するシンポジウムを神戸大学統合研究拠点で行い、その後はヒルトン大阪でフィリップ・ベルギー国王陛下・マチルド同王妃陛下ご出席のもと、Academic Lunchを開催しました。

神戸大学は2010年9月に神戸大学ブリュッセルオフィス (KUBEC) を設立以来、ベルギー国内の大学との学術交流を拡大してきました。シンポジウムでは、①癌研究におけるリサーチ大学との共同研究②貧困問題におけるサンルイ大学との共同研究③移民・安全保障問題におけるルーヴァンカトリック大学との共同研究④グローバルイノベーションに関する神戸大学との共同研究の成果発表が行われました。

国際シンポジウムやワークショップなど、KUBECを拠点とした国際交流活動が今回の開催実現に繋がり、ベルギーにおける本学のプレゼンスの定着を示す機会となりました。



炊き出しのために地域のお母さんたちとおにぎりづくり

被災家屋から仮設住宅への引っ越しの手伝い

仮設住宅の集会所で住民の方々と西原村特産のさつま芋の天ぷらづくり

神大発地球 神大生と熊本復興



わかば meeting



被災地NGO協働センタースタッフ
寺本 わかば TERAMOTO Wakaba
経済学部経済学科 2年

今年4月、熊本県とその周辺地域を襲った「熊本地震」。震度7を観測した地域もあり、最大震度6強、6弱と続いた余震は、地元住民に大きな身体的・精神的被害をもたらした。同県阿蘇市・阿蘇郡も例外ではない。原野と森林に囲まれ、観光・交流施設、直売施設も多く、震災前はドライブやレジャーなどで来訪する観光客も多かった。今回は、同市・郡を中心とした復興支援活動に奮闘する3名の神大生を取材。現在の活動内容や今後の展開などを聞いた。



神戸学院大学主催「東北応援」関西学生ギャザリングにて、寺本さんの登壇

1年間の休学を決意 学内外ボランティアと地域の懸け橋に

地元は阿蘇郡西原村の万徳地区ですが、震災を知ったのは神戸の下宿先でした。帰り、ふるさとでの被害を目の当たりにした時、東北でのボランティア活動を思い出しました。地域の再建は進んでも、被災者のこころのダメージはなかなか癒えるものはありません。家族や友人の悲観する姿を想像し、辛くなったのを覚えています。その頃、本学OBの「被災地NGO協働セン

ター」の代表者から「地域に詳しい人員が求められている」と聞きました。「私にしかできないことがある」と感じ、地元での支援活動のため1年間の休学を決意したんです。面識のない方でも「万徳地区の寺本」と言えばわかってくれる。地元民である強みを生かし、村を周回したり、住民の方の話をお聞きしながら、現地と学内外のボランティア団体を繋ぐことから始めました。現在は「神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti」にも現地で支援活動に参加してもらっています。住民の方は「隣人が

仮設住宅に移り、孤独を感じる」「自宅の被害が少なく、みんなに話しかけづらい」など、さまざまな問題を抱えていらつしやいます。多くの方とお話しし、本当に必要とされている支援を模索しています。

住民によるボランティア団体発足 大事なのは復興の過程

「地元のために何かしたい」という地域の方は多いです。そこで、住民が中心となってボランティア活動を行う「わかば meeting」を立ち上げました。住民自身

神戸大学持続的災害支援プロジェクト「Konti」

大好きな地元の魅力を多くの人に発信していきたい！

「Konti」は持続的な支援活動をモットーに、被災地でのボランティア活動を行っている団体です。運営メンバーは現在13人。阿蘇市・阿蘇郡への派遣の際には、寺本さんが「Konti」と地域を繋いでくださいます。震災後から現在まで、瓦礫撤去や農作業のお手伝い、広報誌の配布や親子工作教室の開催、足湯マッサージなどの活動を行ってきました。

3回現地を訪れましたが、印象的だったのは、阿蘇市の観光農園の方が「ボランティアだけでなく、観光にも来てほしい」とおっしゃったこと。もともと観光業が盛んな同市では、観光客の回帰は復興に直結します。私は地元である熊本が大好きです。今は再建中ですが、熊本市内の大通りから見ると熊本城と路面電車が走る風景は本当に素晴らしいんです。今後は現地での活動だけでなく、熊本が素晴らしい観光地であることを他県の方にも知っていただけるようなイベントも企画したいです。



御手洗 剛 MITARAI Gou
経営学部経営学科 1年

経験と知識を蓄え 被災者一人ひとりにアプローチ

被災者の中には、PTSD*というこころのダメージを受けた方もたくさんいます。9月に「Konti」の現地訪問で初めてボランティア活動に参加した時は、とにかく元気にみなさんと接しようと思っ込んでいました。しかし、実際に被災された方と話すとき、身内を亡くされたり、家が崩壊したり、受けた被害は人それぞれで、一人ひとりに向けた丁寧なアプローチが必要だと気付きました。現地訪問はもちろん続けますが、現在は神戸で開かれる災害・防災・復興をテーマにしたイベントや復興支援活動の報告会にも積極的に参加し、過去の事例や教訓、知識を蓄えています。10月には、全国の若者と今後の熊本との関わり方をテーマに話し合う「くまもと若者会議」にも参加しました。



深田 藍 FUKATA Ai
国際文化学部国際文化学科 2年

学ぶことはたくさんありますが、将来的には被災者一人ひとりと向き合える災害支援団体を立ち上げ、復興支援を続けていきたいです。

わかば meeting 「5つの柱」

- 1 楽しい復興を目指す
- 2 「村民」が自発的に動きだす環境づくり
- 3 震災を機に出て行かざるを得なかった人が戻って来る仕掛けづくり
- 4 元々住んでいる方々と新しく移住してきている人たちのつながりづくり
- 5 ボランティアさんを西原村のファンにしていこう



*Post Traumatic Stress Disorder (心的外傷後ストレス障害) … 強烈なショック体験、精神的ストレスがこころのダメージとなり、時間が経ってもその経験に対して強い恐怖を感じるもの。震災などの自然災害、火事、事故、暴力や犯罪被害などが原因になるといわれている。

インターネットラジオ番組を開始しました

今年9月2日、インターネットラジオ番組「神戸大学 Radio! ～等神大の私たち～」を開始しました。音声を武器に、学生がパーソナリティーを務め、ゲストとともに神戸大学の魅力を全国の高校生、一般の方に発信していきます。



これまでに武田学長のインタビュー、新学部の国際人間科学部、キャンパスライフや受験エピソードの紹介など、様々なテーマを放送してきました。番組は毎週金曜日21時から30分間、インターネットラジオ放送局RadiCroで放送中です。過去の放送は大学ウェブサイトやRadiCroの番組紹介ページで聴くことができます。ネット環境があれば、好きなタイミングでどこからでも聴くことができますので、是非聴いてみてください。

神戸大学サイトトップページ →
右バナー「広報活動」 → 「インターネットラジオ」
<http://www.kobe-u.ac.jp/info/public-relations/radio/index.html>



神戸大プロフェッショナル

国際化推進の鍵を握るキーパーソン

国際部国際企画課国際学術交流グループ職員 安野 恵理 ANNO Eri / エレノア・ワイリー Eleanor WYLLIE



安野：主にヨーロッパにおける国際学術交流の企画やコーディネートを担当しています。海外の大学を訪問したり、海外の教育機関の方と話したりする機会も多いので、よいところを本学にも適用できないか、ワイリーさんとも相談・連携して決めていきます。

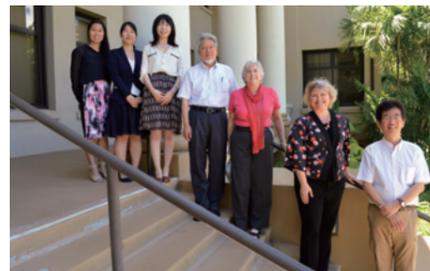
また、職員の国際化への意識啓発、語学力アップを目指して国際業務研修を実施しています。若手職員が積極的に参加しているので、うれしいですね。

神戸大学の情報をもっと海外に届けば、学術交流がより盛んになると思うので、情報発信はとても大事。英文ニュースレターや研究情報をまとめた冊子を作成したり、動画を活用したりして神戸大学を積極的に広報していきたいです。

ワイリー：私は国際広報担当で、日本語でプレスリリースされた研究成果やイベント情報などを英訳して情報発信していく仕事をしています。理系の研究内容は今まで関わる機会がなく、大変。辞書やインターネットで表現方法や専門用語を調べ、より正確に伝わるような翻訳を心がけています。

また、神戸大学は様々な学部や研究機関がある大きい組織なので、把握するのに時間がかかりました。私にとって1つの町みたい(笑)。

今後は学内にアンテナを張って情報量を増やしていくとともに、学生にも参画してもらって国際広報を拡充させていきたいと思います。



ハワイ大学マノア校へ表敬訪問

読者の皆様へアンケートのお願い

神戸大学広報誌『風』8号をお読みになったの感想をお聞かせください。今後の誌面作りの参考にさせていただきます。

1.どの記事に関心を持たれましたか 2.その記事についてどのような感想を持たれましたか 3.今後読みたい記事 4.その他何でもご感想を

アンケートの回答は神戸大学広報課のメールアドレスをお願いします。

✉ ppr-kouhoushitsu@office.kobe-u.ac.jp
※ご職業、年齢を書き添えていただくと幸いです。

WEBフォームもありますので
今すぐアクセス!



日々情報更新中!



神戸大学公式 Twitter
「@KobeU_PR」



神戸大学公式 Facebook
「神戸大学_Kobe University」



「フォロー」「いいね!」
お願いします。

出光佐三と神戸高等商業学校

大学文書史料室長補佐 野邑 理栄子
NOMURA Rieko



在学中の出光佐三

2016年12月公開の映画「海賊とよばれた男」の主人公は、神戸大学の前身である旧制官立神戸高等商業学校(神戸高商)出身の出光佐三がモデルである。石油事業を主とする一大企業・出光興産株式会社を築いた出光は、「人間尊重」を経営の原点に掲げ、家族的愛情で社員を育成し、利益追求よりも世のため人のために尊重したといわれる。

実はこの経営理念の根底には、母校神戸高商での経験があった。

東京に次ぐ全国2番目の官立高商として1902(明治35)年に設置された神戸高商は、当時東京帝国大学や京都帝国大学に経済学部がまだ設置されていなかったなかで、商学・経済学分野における日本の最高学府であった。1905(明治38)年、福岡市立福岡商業学校を卒業した出光は、郷里の福岡県を一人離れて神戸高商に入学した。商業学校卒業生には高等教育機関への進学がほぼ閉ざされていたが、神戸高商では、中学校卒業生だけでなく商業学校卒業生にも広く門戸を開いたため、全国各地から優秀者が神戸に押し寄せた。出光もその一人であった。

神戸高商での学生生活は、出光を大きく成長させた。出光の回想によれば、当時の神戸高商生たちは、大阪のあくどい金儲け主義を見て反感を抱き、「黄金の奴隷となるな」、「社会の中心は人間でなければならない」と主張し合った。こうした経験が「人間尊重」という自らの経営理念の確立につながったという。



出光在学当時の校友会武術部柔道科



出光在学当時の神戸高等商業学校。1909(明治42)年頃
当時学舎は神戸市暮合町筒井村(現在の中央区野崎通)にあった。

この度神戸大学は、平成28年度税制改正の対象となる大学として、文部科学省から承認されました。
このことにより、経済的な理由で修学が困難である学生等への支援事業(修学支援事業)に対する寄附金は、確定申告の際に「税額控除」と「所得控除」のいずれかが選択できるようになりました。本学では、現在修学支援事業として、経済的困難度の高い新一年次生を対象とした奨学金制度を実施しています。

税額控除制度が導入されました

神戸大学基金だより

経済的な理由で修学が困難である学生等への支援事業(修学支援事業)に対する寄附金は、税制上の優遇措置として「税額控除」が選択いただけます。

減額される所得税の目安

例:給与収入700万円・課税所得400万円の方が3万円寄附した場合
税額控除: (30,000 - 2,000) × 40% = 11,200円

所得控除: (30,000 - 2,000) × 20% (所得税率) = 5,600円

[お問い合わせ先] 神戸大学基金推進室(企画部社会連携課内)

TEL: 078-803-5414 E-Mail: kikin@office.kobe-u.ac



グローバル人材になりなさい―世間でよく言われますが、きちんと説明しがたい言葉ではないでしょうか。国際文化学部と発達科学部が再編統合して誕生する国際人間科学部はその体現を目指す学部。今年4月に誕生した科学技術イノベーション研究科に続き、神戸大学は真に社会に貢献する人材の養成を推進していきます。

(広報課)

風 Dec.2016
Vol.08

発行日/2016年12月

編集・発行/神戸大学総務部広報課

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

TEL/078-8003-5083

FAX/078-8003-5088

アートディレクション・デザイン/有限会社オタクリエーション

印刷/能登印刷株式会社

©2016 神戸大学

※本誌に掲載されている記事、写真、図表の無断転載を禁じます。